

【書評】

溝口和宏著『現代アメリカ歴史教育改革論研究』

(風間書房, 2003) 9200 円

梅津正美  
(鳴門教育大学)

本書は、溝口和宏氏が1996年に広島大学に提出された学位論文を公刊されたものである。本書を貫く溝口氏の問題意識は、民主主義社会における市民的資質の育成に歴史教育はいかなる役割を果たせるのか、というものである。それに対する理論的解答の中核をなす目標原理が、「開かれた価値観形成」である。溝口氏は、歴史事象それ自体に意味はないとする歴史哲学を基盤に、通史教授が、歴史を必然的な過程と捉え、事象の意味理解を通じて価値注入となっていることを批判する。そして、それを克服する新たな視座として、歴史を過去の個人・集団の選択・判断の帰結ないしは集積として描くことによって、子どもの開かれた価値観形成を実現すべきであると主張するのである。

本書は、以下の章から構成されている。

序章 研究の意義と方法

第一章 歴史教育における開かれた価値観形成

第一部 「価値分析」型歴史教育論

第二章 「思想」分析型—B.レオーネの『イズム：近代の思想と運動』の場合—

第三章 「政策」分析型—J.C.シャルバーグらの『アメリカ史における対立する見解』の場合—

第四章 「制度」分析型—『ハーコート社会科』の場合—

第五章 「宣伝」分析型—S.プロデリックの『アメリカ史におけるプロパガンダ』の場合—

第六章 「判例」分析型—R.ラトクリフらの『合州国憲法の重要問題』の場合—

第二部 「価値追究」型歴史教育論

第七章 「選択的」価値追究型—A.L.ロックウッドらの『民主的価値による推論』の場合—

第八章 「調停的」価値追究型—D.W.オリバーらの『公的論争問題シリーズ』の場合—

終章 民主主義社会における歴史教育

溝口氏は、開かれた価値観形成をめざす歴史教育論を、人々の選択・判断の結果として事象に内包されてきた価値の批判的吟味に重点をおく「価値分析型」と、そこからさらに進んで、子ども自らがより望ましいと考える価値を追究し、事象に内包させていく方法を習得していく「価値追究型」とに大別している。「価値分析型」は、事象への価値の内包のされ方によって、「思想」「政策」「制度」「宣伝」「判例」の各分析型に類別される。また、「価値追究型」は、子どもの価値の追究のさせ方に応じて、「選択的」価値追究型と「調停的」価値追究型とに分類される。こうした類型を基に、それぞれの典型事例となる歴史教材の分析を通じて、目標・内容・方法を貫く理論を抽出し一般化していく手順が氏の主要な研究方法論となっている。

本書の最大の意義は、歴史による開かれた価値観形成の方法原理を具体的に解明することを通じて、市民的資質育成教育としての歴史教育の意義と「社会科歴史教育論」における独自の位置を明示したことにある。歴史教育における価値観の介在を前提としつつも、価値認識、価値判断の問題には意図的に踏み込まないで、「歴史による社会構造・問題の科学的研究過程」として授業を組織し、子どもの社会認識を科学知により開くことをめざす「社会科学科歴史」の立場に対して、事実認識、価値認識、価値判断・意思決定を結びつけた授業過程を組織し、子どもに民主主義社会の価値を主体的に批判・創造させようとする本研究の主張は、「市民社会科学歴史」とでも呼べる独自の教科論的立場を提示しており、示唆に富んでいる。歴史教育を原理的に考察しようとする多くの方々に一読をお薦めしたい。そして、本書で提起されている理論の有効性と日本の教育実践への応用可能性について互いに議論を深めてゆきたい。